方形周溝墓からみた弥生時代前期社会の様相

―近畿・東海地域を中心として―

浅　井　良　英
人間文化学研究科地域文化学専攻博士後期課程 2015 年単位取得満期退学

はじめに

どの時代においても、墓制は被葬者のみならずその人が生きた時代の様相や思想を強く反映している。そのため、ある時代の社会構造や変遷が墓制の研究を通して論じられることが多い。とりわけ、金石文・文書類などの記録の乏しい時代の社会様相を明らかにするには、当時の墓制を研究することが有効である。

方形周溝墓は細い溝で方形の区画を設けて、その区画内に死者を埋葬する墓である。弥生時代を通して九州地方から東北地方にかけて広くみられる代表的な墓制であり、これまでに5,000基以上の検出があると報告されているが（山岸2015）、その実数を把握するのは困難な状況にある。これまでの報告では、その初現は弥生前期までさかのぼり、当該期に優勢を占める土壙墓・土器棺墓と併行する。また、その分布状況も近畿・東海地域に偏在することがわかってきている。

方形周溝墓という新しい墓制の起源やその出現の背景について諸説が提出されてきたが[1]、実証的かつ十分な説明がなされているとは言えない。これらは人の精神面、ひいては思想面にかかわることであり、考古学的な遺構・遺物からではおのずと限界があるものと推定される。

近年、これまで現地説明会資料や概報からの情報のみであった遺跡の調査報告書も順次発行され、新知見も蓄積されつつある。本稿では、このような研究状況・成果・背景を念頭におきつつ、近畿・東海地域の方形周溝墓をとりあげ、その出現状況、墓域の変遷状況、墓群の群構成を視点とした事例研究から、当該社会の集団と階層、そして弥生前期の社会像を論じたい。

1．弥生時代前期の方形周溝墓の集成

1．1　集成にあたって

弥生前期の方形周溝墓の集成作業は山田清朝（同1995）の仕事を嚆矢として、その後、新出資料を追加する形で進められてきている（山田1995、本間1997、角南1999、中村大介2004）。

本稿では出現期の方形周溝墓が集中する近畿・東海地域の弥生前期の方形周溝墓を対象とした。その集成表を表１に、その所在地を図１に示す（表１・図１の遺跡番号は共通で、以下、本稿中にでてくる遺跡名のあとの数字は遺跡番号を示す）。また、方

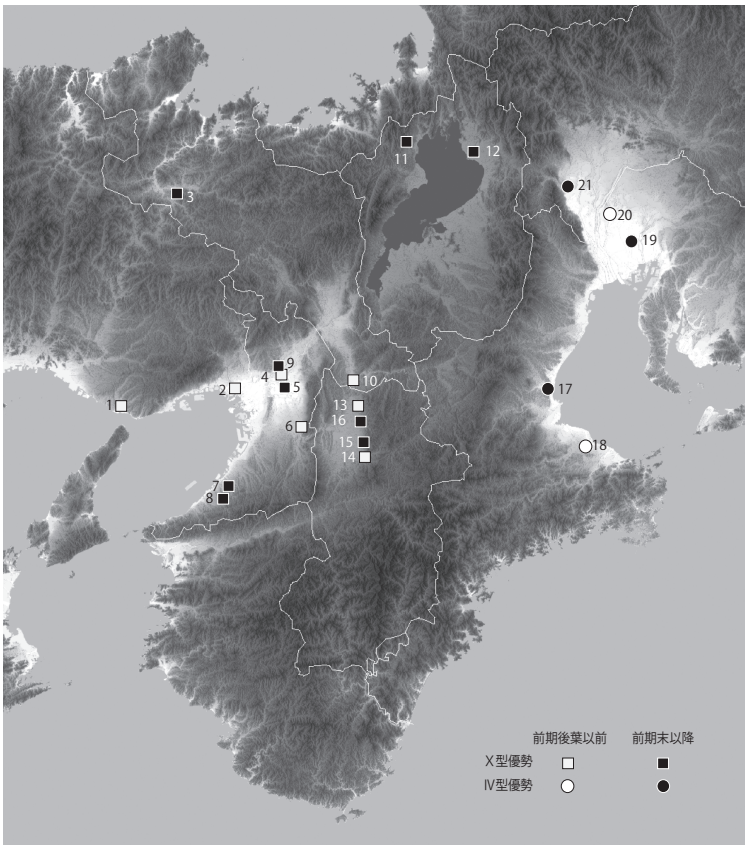
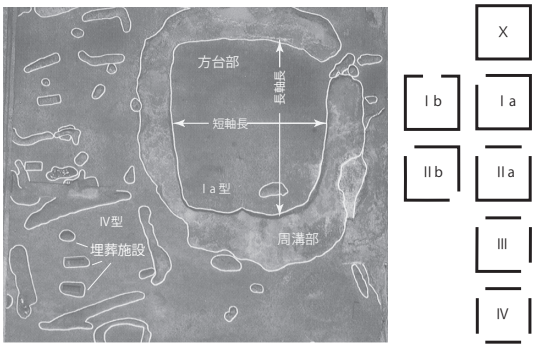


図１　弥生時代前期の方形周溝墓の分布

表１　弥生時代前期の方形周溝墓集成表

遺跡番号	遺跡名	遺跡所在地		立地	遺構名	弥生時期区分	台状部規模(m)		周溝部形状	埋葬施設		副葬品（土器以外）	特記事項
							長軸	短軸	（推定）	種類	主体数		
1	玉津田中	兵庫県	神戸市		方形周溝墓	前期後葉～							
2	東武庫		尼崎市	後背湿地	方形周溝墓1号	前期新段階古	7.8	6.3		木棺	1		
					方形周溝墓2号	前期新段階古	7.0	6.0	Ⅰa	木棺	1	竪櫛・不定形石器	
					方形周溝墓3号	前期中段階古	9.6	7.5	Ⅳ		1		
					方形周溝墓4号	前期中段階古	11.4	9.1	Ⅳ	木棺2・土壙1	3	楔形石器	
					方形周溝墓5号	前期新段階古	3.7	2.7		土器棺	1	石鏃	
					方形周溝墓6号	前期中段階新	6.8	5.4		木棺	1		
					方形周溝墓7号	前期中段階古	5.6			木棺	1	磨製石器	
					方形周溝墓8号	前期	3.5	3.3					
					方形周溝墓9号	中期初頭	9.3	8.8					
					方形周溝墓10号	前期新段階古	14.0	12.3	Ⅰa			石包丁・礫	
					方形周溝墓11号	中期初頭	6.8	4.6		木棺	1		
					方形周溝墓12号	前期中段階古	6.0	4.0					
					方形周溝墓13号	前期新段階新	4.0			？			
					方形周溝墓14号	前期新段階古	5.8	5.5		？			
					方形周溝墓15号	前期新段階新	16.0	8.5				磨石	
					方形周溝墓16号	前期新段階古	7.0	6.8				楔形石器	
					方形周溝墓17号	前期新段階新	4.3	3.5					
					方形周溝墓18号	前期新段階新	5.7	3.4					
					方形周溝墓19号	前期新段階古	6.5	3.5					
					方形周溝墓20号	前期古段階	6.5						
					方形周溝墓21号	前期新段階古	3.8					楔形石器	
					方形周溝墓22号	前期古段階	4.4						
3	駄坂・舟隠	兵庫県	豊岡市	尾根	方形周溝墓4号	前期新段階～中期初頭	7.3			木棺・土壙	2	打製石鏃1	土壙は石蓋
					方形周溝墓7号	前期新段階～中期初頭	7.2						
					方形周溝墓9号墳下層	前期新段階～中期初頭				木棺？	1	磨製石鏃2、打製石鏃5、チップ1	
					方形周溝墓11号	前期新段階～中期初頭	11.0	7.3		木棺	1	打製石鏃1	
					方形周溝墓12号	前期新段階～中期初頭	6.5	4.2		木棺	2		
					方形周溝墓13号	前期新段階～中期初頭	10.5	6.0		木棺	1	管玉125＋、打製石鏃1	
					方形周溝墓14号	前期新段階～中期初頭	11.3			木棺	1	打製石鏃1	
					方形周溝墓15号	前期新段階～中期初頭	4.0						
4	東奈良	大阪府	茨木市	微高地	方形周溝墓①	前期後葉							G-4区
					方形周溝墓②	前期後葉				壺棺	1		G-4区
					方形周溝墓④	前期後葉				土壙	1		G-4区
					方形周溝墓⑤	前期後葉				土壙	1		G-4区
5	古川	大阪府	門真市		方形周溝墓1	前期末	8.0	6.4					
					方形周溝墓5	前期末	6.0						
					方形周溝墓6	前期末							
					方形周溝墓7	前期末							
					方形周溝墓9	前期末							
6	田井中	大阪府	八尾市	自然堤防	方形周溝墓96	前期後葉	12.4	9.3					
7	四ツ池	大阪府	堺市	丘陵	方形周溝墓	前期	7.5	7.5					1973年3区
8	池上	大阪府	和泉市	段丘	方形周溝墓I-1号	前期新段階	8.3	7.0		土壙	2		I地区
9	安満	大阪府	高槻市	氾濫原	方形周溝墓A1	前期末							近畿住宅
10	稲葉	京都府	京田辺市			前期後葉							
11	北仰西海道	滋賀県	高島市		方形周溝墓SX5	前期後葉							4次調査
12	塚町	滋賀県	長浜市		方形周溝墓SX01	前期末	7.5	7.2				石包丁	6次・7次調査
					方形周溝墓SX02	前期末	5.1						
					方形周溝墓SX03	前期末	4.8	3.9					
					方形周溝墓SX04	前期末	3.5						
					方形周溝墓SX05	前期末	4.4	4.2				扁平片刃石斧	
					方形周溝墓SX07	前期末	10.9						
					方形周溝墓SX09	前期末	9.1						
13	平城宮跡右馬寮	奈良県	奈良市	微高地	方形周溝墓SX16360	前期後葉	11.0	9.5					246次調査
14	坪井・大福	奈良県	橿原市		溝1	前期後葉							
15	多	奈良県	田原本町	微高地	方形区画墓状遺構	前期末	7.0			土壙		石包丁	第11次
16	伴堂東	奈良県	三宅町		方形周溝墓STO3	前期末	12.5	8.1					
17	松ノ木	三重県	津市	微高地	方形周溝墓3	前期末	9.0	6.0					C地区
18	コドノB	三重県	明和町		方形周溝墓SX37	前期後葉			Ⅳ				
					方形周溝墓SX86	前期後葉			Ⅳ				
19	朝日	愛知県	清須市	微高地	方形周溝墓	前期末				1			
20	山中	愛知県	一宮市	自然堤防	方形周溝墓SZ01	前期後葉	9.8	8.0	Ⅳ				遠賀川系土器
					方形周溝墓SZ02	前期後葉	10.0	7.0					
					方形周溝墓SZ03	前期後葉	10.8	10.5	Ⅳ				
					方形周溝墓SZ04	前期後葉	8.0	6.7				打製石鏃4、打製石錐1、石核剥片	
					方形周溝墓SZ05	前期後葉	5.6	4.2					
					方形周溝墓SZ06	前期後葉	6.5	5.6	Ⅳ			打製石鏃1	
					方形周溝墓SZ07	前期後葉	6.5	5.1					
					方形周溝墓SZ08	前期後葉	8.4	6.0					
					方形周溝墓SZ09	前期後葉	9.5	7.0					
21	荒尾南	岐阜県	大垣市	氾濫原	方形周溝墓SZ137	前期	2.7						
					方形周溝墓SZ138	前期後半	6.5	5.5				石器1	
					方形周溝墓SZ145	前期	7.1	6.8					
					方形周溝墓SZ153	前期	5.6	3.4				石器1	
					方形周溝墓SZ154	前期	8.2	8.2					
					方形周溝墓SZ170	前期	10.5	8.0	Ⅳ			石器1	
					方形周溝墓SZ171	前期							
					方形周溝墓SZ174	前期	3.0	2.0					
					方形周溝墓SZ192	前期	7.8	6.6	Ⅳ				



(a) 方形周溝墓の各部名称（図版は『東武庫遺跡』より引用）　(b) 周溝形態の分類

図２　方形周溝墓の各部名称と周溝形態の分類

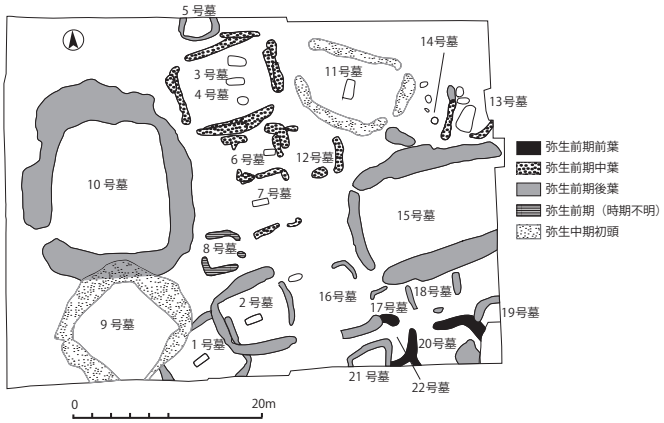


図３　墓域の変遷(1)　東武庫遺跡２

形周溝墓の各部の名称、規模の計測位置、周溝形態の分類などは図２の通りである。

報告書により弥生前期の時期区分が異なることがあるが、弥生時代を前期・中期・後期に区分し、本稿の主題の時期となる弥生時代前期についてはさらに前半・後半、あるいは前葉・中葉・後葉・末に小区分して、弥生前期中葉、弥生中期などと記述する。集成表では報告書に記載の時期区分の名称をもちいた。

１．２　弥生前期の方形周溝墓概観

弥生前期の方形周溝墓は表１・図１の通り21遺跡、79基にのぼる。すでに先行研究において多くの分析・考察がされているので、それらに導かれながら分布・形態などについて概観しておく。

弥生前期の方形周溝墓の分布状況は、大きくは、鈴鹿山地をはさんで近畿地域と東海地域に偏在している。両地域ともに弥生前期後葉以前のものが存在し、最古のものは大阪湾岸の東武庫遺跡２で、弥生前期前半までさかのぼる[2]。ここで、駄坂・舟隠遺跡３は丘陵上に造られており、立地面では他のものと異なり台状墓に分類されることもある。

方形周溝墓の平面形態は方台部が正方形・長方形で分類され、さらに周溝形態でも、その周溝が全周する型、隅が切れる型などの７類に分かれる（図２）。ただ、多くの墓は削平された状態で検出されるので、当初の周溝の形態については慎重な判断が要る。このような事情を考慮した上でも、周溝形態はやはり近畿地域と東海地域では異なり、近畿地域では周溝が全周するもの（Ｘ型・近畿系）が優勢を占め、東海地域では隅が欠けるもの（Ⅳ型・東海系）が優勢を占めていると理解されている。

２．弥生前期の方形周溝墓の様相－事例研究

墓域として弥生前期・中期・後期・古墳初期にわたるものをとりあげ、その墓域における方形周溝墓の出現状況、変遷状況、さらに群構成などを報告書にもとづいて検討する。事例としてとりあげるのは東武庫遺跡２（兵庫県尼崎市）・北仰西海道遺跡11（滋賀県高島市）・山中遺跡20（愛知県一宮市）・荒尾南遺跡21（岐阜県大垣市）であるが、地域間での比較を目的とするものでない。

２．１　東武庫遺跡２（図３）

この遺跡は弥生前期前半から中期初頭に至るが、検出された遺構・遺物はさらに６段階の小時期に分かれる。調査区域は約2,000㎡と狭いが、22基の方形周溝墓群が検出されており、その分布密度が高い。弥生中期初頭には武庫川の氾濫により廃絶する短期的な墓域である。

方形周溝墓の出現状況　この墓域では数基の土壙も検出されているものの、当初から方形周溝墓を造営するための墓域であったとみられる。方形周溝墓の規模は方台部に大小があり、最大のものは10ｍ前後を測る。平面形態は長方形を呈するものが多く、周溝の形態は図２に示す型のほぼ全てがみられる。墳丘の規模はかなりのバリエーションがあるものの、弥生中期以降と比較して、盛土は厚く盛らない傾向にある。

埋葬施設は７基から検出されており、土壙・土器棺・木棺が検出されている（表１）。このうち複数埋葬は４号墓（主体数は木棺２基、土壙１基の計３

基）のみで、単数埋葬が優勢である。また、単数埋葬の主体部はほぼ墳丘の中央部にあるが、複数埋葬では中心にはない。層位の検討から埋葬施設の位置は生活面より上方か、一部掘り込んでいる。つまり、周溝を掘削し方台部に盛土を積んで、そこに埋葬施設を納めたと報告されている。

遺物としては周溝・土壙・溝状遺構などから土器・石器・装身具が出土した。２号墓では周溝から在地の胎土をもちいた「擬朝鮮系無文土器」が、埋葬施設から赤漆塗りの竪櫛が出土していることが特筆される。

墓域の変遷状況と群構成　遺構の切り合い状況および供献土器から方形周溝墓22基の築造順序があきらかにされ、さらに方台部の長軸方位を考慮して群構成が推定されている。すなわち、22基を５グループに分け、各々のグループでの築造順序を示した上で、一小時期にはせいぜい数基の造墓がなされていたに過ぎないと報告されている。ここでみられる多くの切り合い状況のうち、同じグループ内の３・４号墓はほぼ重なるように、重複埋葬の様相を呈している。

２．２　北仰西海道遺跡（きとげにしかいどう）１１（図４）

この遺跡では縄文時代晩期から古墳時代初頭にかけての遺構が検出されており、とくに縄文時代晩期には土壙墓群・土器棺墓群により構成される大墓域となる。さらに調査区の隣接地にも同規模の遺構があると推定されており、長期にわたり墓域として土地利用されていたことをうかがわせる。当然、近辺にはこの遺跡を墓域とする当該期の集落の存在が予想される。

方形周溝墓の出現状況　縄文晩期中葉（滋賀里Ⅲ式）前半を最古として、縄文晩期末（滋賀里Ⅴ式）にいたるまで250基以上の土壙墓、90基以上の土器棺墓が営々と造られた。そして、弥生前期後葉になると方形周溝墓SX5が、弥生中期にはSX6～SX14が、そして弥生後期にはSX2～SX4が造られる。このように、土壙墓・土器棺墓の墓域に方形周溝墓が、突然、出現する状況にある（図４b）。

墓域の変遷状況　墓域として前述の通りの変遷を経るが、方形周溝墓が出現する弥生前期後葉以降では方形周溝墓からなる墓域となり、土壙墓・土器棺墓がみられない。ただ、弥生中期中葉には方形周溝墓に並行して15基の土壙が検出されているが、個々の土壙が埋葬施設の主体部かどうかの判定にはいたっていない。

墓群の群構成　方形周溝墓が出現する前の墓域では、土壙墓・土器棺墓とも複数の小群をもち、これらの小群が環帯状に配置される環状墓域の様相を呈している。個々の小群は4基前後からなるもの、10基前後の列状配置をとるもの、並列配置をとるものなどがみられる。この様相は一つの居住域に複数の集団が存在することを示しているのだろう。ただ、報告書では他の遺跡例をふまえ、土壙墓は成人が、土器棺墓は小児が埋葬されているとは言えないと指摘している。

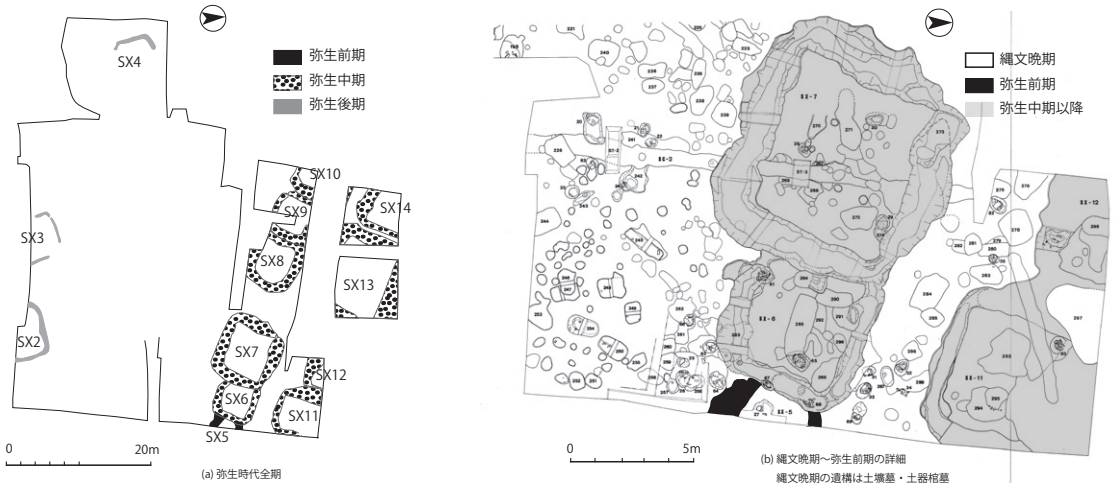


図４　墓域の変遷(2)　北仰西海道遺跡１１

図５　墓域の変遷(3)　山中遺跡20

弥生中期中葉に方形周溝墓群の墓域として盛期をもつが、ここでは方台部の方位に着目すると、A群(SX5 ～ SX10)、B群(SX11 ～ SX14)の二つの小群構成をもち、それらの規模には差がみられる。またA群においては弥生前期のSX5と弥生中期中葉のSX6 ～ SX10が群構成をとることが特筆される。

２．３　山中遺跡20(図５)

この遺跡の遺構・遺物は弥生前期から中世まで続くが、本稿では弥生前期から古墳前期までを対象とする。遺構・遺物は、弥生前期で遠賀川系土器を伴わず粗製土器のみ出土する段階(Ａ１)、確実に遠賀川系土器を伴う段階(Ａ２)、そして弥生後期～古墳前期(Ｂ)の３時期に分かれる。

層位の検討からＡ１・Ａ２期の遺構は洪水等によって一気に廃絶し、Ｂ期に再び墓域として土地利用されたとみられる。

方形周溝墓の出現状況　弥生前期Ａ１では土壙墓１基(SK01)、Ａ２期では方形周溝墓９基(SZ01 ～ SZ09)および竪穴建物10棟(SB10 ～ SB19)、Ｂ期では方形周溝墓８基(SZ10 ～ SZ17)が検出されている。Ａ１期には土壙墓が１基あるが、Ａ２期に新たに方形周溝墓からなる本格的な墓域が始まったといえるだろう。

Ａ２期の方形周溝墓の平面形態は正方形で、周溝形態は四隅が欠けるⅣ型である。方台部の規模はせいぜい10ｍ程度である。Ｂ期には四隅欠けがなくなり、一辺に欠けをもつ型になる。規模も最大のものは16ｍを越え、前方後方形に造り変えられたもの(SZ13)もある。

墓域の変遷状況　Ａ２期の方形周溝墓群は環濠SD01をはさんで反対側に竪穴建物群が存在し、墓域と居住域とが明確に分かれていたことがわかる。さらに出土土器の分析から、同じ前期Ａ２期の遺構ではあるが、竪穴建物SB10・11・16 ～ 19は方形周溝墓群に先行して造られ、その後、方形周溝墓群が造営され併行して、竪穴建物SB12 ～ SB15が造られたことがわかった。すなわち、この地での生活が始まり、建物が建て替えられ、人が亡くなり墓を造り、さらに環濠を掘削して居住域と墓域を分けて暮らしていた生活空間を髣髴とさせる。

その後(弥生末までに)、この地域は洪水にみまわれ居住域は衰え、墓域としても土地利用がなされないまま、Ｂ期には墓域としてふたたび利用されることになる。周溝の形態は一部の隅が欠ける型となり、規模も15ｍを越えるものもある。

方形周溝墓の群構成　弥生前期Ａ２において明確な群構成はみられないが、比較的中規模なグループ(SZ01～03・08・09)と小規模なグループ(SZ04 ～ SZ07)に分かれ、各々塊状に配置されているとみることができる。Ｂ期には分布は広範囲にわたるようであるが、各調査区域が離れているので、群構成の検討はできない。

2.4　荒尾南遺跡21（図6）

この遺跡は弥生前期から古墳前期まで続く墓域・居住域であり、弥生中期中葉までに方形周溝墓が約230基、弥生中期後葉以降には竪穴建物・掘立柱建物約600棟からなる遺跡である。遺構・遺物は弥生前期（Ⅰ期）、弥生中期中葉まで（Ⅱ・Ⅲ期）、弥生中期後葉以降（Ⅳ期）に分かれる。調査区はA・B・C区に分かれるが、遺構の粗密を考慮して、本稿ではA・B区を中心に検討する。

方形周溝墓の出現状況　弥生Ⅰ期にはすでに土壙墓・土器棺墓・木棺墓からなる墓域に近接して方形周溝墓（9基）がB区の西南に偏在する。平面的な分布に特徴はなく、後の時期のものと重複するものがある。従来の明確な墓域に出現する点では北仰西海道遺跡11と同じ出現状況といえる。

墓域の変遷状況　時期ごとにこの墓域の利用をみると、Ⅰ期・Ⅱ期・Ⅲ期の各時期によって墓群の分布の中心が移動している。つまり、先行の墓域を避けて造墓している。

図6　墓域の変遷(4)　荒尾南遺跡21

Ⅰ期ではA区に偏在する。やや長方形を呈するものが多く、周溝の形態は隅欠き型が優勢である。周溝を共有するものがあるが重複するものはない。Ⅱ期になると本格的な方形周溝墓の造墓活動が始まった。周溝を共有するものが目立ち、より群構成が意識されてくる。Ⅲ期にはより整然とした列状の分布を呈し、両列の中央に南北の空閑地域があり、墓道の可能性もある。このような列状配置は調査区域外にも大きく広がるものとみられる。

Ⅳ期になると造墓活動はほぼⅡ期の墓群を覆い、より広大な墓域となり、その盛期をむかえる。A区西部では方位を揃えて比較的に整然と配置されているが、B区南部では濃密に分布しており、方位が異なり重複するものもある。形態はほぼ正方形で、四周に周溝がめぐるX型が優勢を占め、山中遺跡20と同様の変化がみられる。

墓群の群構成　上述の変遷でもみたとおり、Ⅰ期においては狭い範囲に集中するものの、分散的な分布である。Ⅱ期・Ⅲ期には周溝を共有するものが多くなり群構成がみられ、墓域の利用に企画性がうかがえる。ところが、Ⅳ期になると4基程度を単位として造墓され、これが塊状となり、場所によってその塊が連結する場合と、連結しない場合がある。あきらかにⅡ・Ⅲ期よりも統一性が少なくなって、個別の塊状が強くなっている。また墓域全体に分布し、先行の墓を削平・破壊している状況がうかがえる。

2.5　事例研究のまとめ

以上の事例研究での分析を中心に各遺跡に共通する事象、共通しない事象を、以下にまとめる。

1）方形周溝墓の出現状況

従来の墓制（土壙墓・土器棺墓）と方形周溝墓が混在する墓域（北仰西海道遺跡11・荒尾南遺跡21）と、方形周溝墓のみから構成される墓域がある。表1にみられるように、どちらの墓域においても出現期の方形周溝墓の数はせいぜい数基で、多くの墓域では1基の検出にとどまる。

これに対して数基以上の方形周溝墓が検出されている墓域では東武庫遺跡2を典型例として、どの墓域でも狭い範囲に密集している傾向にある。そのよ

うな稠密状態の極致が、東武庫遺跡２・荒尾南遺跡21にみられるような、先行墓と重複した造墓状況である（重複埋葬）。

最古の方形周溝墓群である東武庫遺跡２では、方形周溝墓の多様な様相がみられる。すなわち、方台部規模の差、周溝の形態での隅欠け状況、埋葬施設では土壙・土器棺・木棺、主体部数では単数・複数などの諸相である。また、埋葬施設は生活面より上、つまり、方台部に盛土を積んでそこに埋葬施設が設置されていると理解できる。このような弥生前期の方形周溝墓の諸相は、その後の弥生中期・弥生後期・古墳初期を通して他の地域においてもみられるもので、方形周溝墓のもつ諸相の多くがすでに出現期から存在しているといえる。

２）墓域の変遷

弥生前期から古墳初期に至るまでの墓域の変遷をみると、短期的に利用されている墓域（東武庫遺跡２：弥生前期～中期初期）、長期的にわたり造営される墓域（北仰西海道遺跡11・荒尾南遺跡21；弥生前期～古墳初期）、一旦途絶えるものの再度使用される墓域（山中遺跡20：弥生前期、および弥生後期以降）がある。

長期にわたり造営される墓域においては、時期の経過とともに方形周溝墓の規模が大型化している。また、周溝の形態について東海地域では弥生前期に周溝の一部が切れる東海系が優勢であるが、後期になると近畿地域に優勢な四周を溝がめぐる近畿系に統一される傾向が看取される。

墓域は、当然、居住域にともなうものであるが、山中遺跡20では溝をはさんで墓域に近接して竪穴建物跡（居住域）が検出されている。この状況は古川遺跡５でもみられ、弥生前期には墓域と居住域を明確に区分けすることが普遍化していたといえる。また、先述の墓域の変遷は対応する居住域の盛衰を反映しいるといえるのであろう。

３）方形周溝墓群の群構成

墓域における方形周溝墓の配置は造墓に際して先行墓の周溝を共有することがあり、また、完全に重ねる重複埋葬もみられる（東武庫遺跡２、荒尾南遺跡21）。この事象については後章で詳論する。

墓域に密集する墓群内において周溝を共有するものや、方位を揃えた一群を抽出することができるが、この事象は弥生前期と弥生中期のように時期を隔てて出現している方形周溝墓群内においても観察され、時を経ても、あきらかに群構成を意図しているものと考えられる。

３．方形周溝墓からみた弥生時代前期の社会像

以上の事例研究で得られた知見に基づいて弥生前期の社会像、とりわけ、方形周溝墓造墓集団と社会階層について考えてみたい。

３．１　方形周溝墓という新しい墓制

１）どのように新しいのか

方形周溝墓という平面形態にとらわれがちであるが、ここでは被葬者の埋葬位置に着目する。縄文時代の墓制は主として土壙墓・土器棺墓・木棺墓（以下、これらを従来墓と呼ぶ）であり、死者をそのまま埋葬するか、あるいは土器棺・木棺に納めて埋葬するかの違いはあるものの、どの葬法をもちいても死者を生活面よりも下、つまり地下に埋めることになる。

これに対して、弥生時代の方形周溝墓は死者を生活面よりも上に置くというものである。これは縄文時代の墓制の延長では考えられないもので、従来墓と方形周溝墓は異質の墓制である。一般的に墓制は保守的な習俗といえるが、それにもかかわらず、従来の墓制を変化させるということは、その背景として思想的な変化があったとみるべきであろう。

２）方形周溝墓の起源の問題

最古の方形周溝墓群がある東武庫遺跡２の２号墓で擬朝鮮系無文土器が出現していること、寛倉里遺跡（韓国・忠清南道保寧市 ）の周溝墓が紀元前３世紀までさかのぼりえることなどから、その起源を韓半島に求める考えがあった（渡辺1999）。しかし、韓半島から伝わったとしても、その中継地である九州北部地域・中国地域にかけて弥生前期の方形周溝墓が見られないことから、近畿・東海地域の在地固有の墓制という従来からの考えも支持されてきた。

このような方形周溝墓の起源論の流れにあって、中村弘（同1998）は、韓半島の墓制情報が水稲耕作情報とともに九州北部経由で近畿に伝わり、在地人がそれらの情報を取捨選択し既存社会に適合する墓制として方形周溝墓を創出したと論じた。また、中

村大介（同2004）は、被葬者を生活面よりも上に置くという視点から韓半島や大陸の墓制を検討し、韓半島南部の支石墓に一時期みられた地上式の埋葬施設の情報が方形周溝墓成立に影響を与えたとする。いずれの論に立っても、在地の人々が韓半島からの墓制情報をリレー式に収集・咀嚼し、その社会に適合した在地固有の墓制を創出した、その一つが近畿・東海地域においては方形周溝墓という墓制であるといえるだろう[3]。

ところで、在地人にとって新しい墓制は長い時間をかけて受容・定着させるものであろう。方形周溝墓の起源を中村弘・中村大介が論じる通りとすれば、方形周溝墓の出現の契機となる新しい墓制情報は、その出現時期より相当早い段階に伝わっていたと想定せざるを得ない。端野晋平（同2014）は気候の寒冷化が紀元前８世紀後半に始まり、それにともない韓半島から日本列島への渡来が始まって、半島・列島での双方向の情報伝達網ができあがり、その後、紀元前６世紀半ばには気候が安定し九州北部で水稲農耕が本格化すると論じる。これらの情報網には水稲農耕とともに墓制情報も含まれていただろう。これが九州北部から東漸し近畿に到達・熟成するのは縄文晩期から弥生初頭といえるのではないか。

３．２　方形周溝墓と集落

１）造墓集団と集落

方形周溝墓を在地固有の墓制であると考えた場合、弥生前期において近畿・東海地域には従来墓をもつ集団と、方形周溝墓という墓制を創出した集団の存在が想定される。では、在地人でありながら方形周溝墓の造墓集団とはどのような人々であったのか。

事例研究では、従来墓が優勢な墓域に新しい方形周溝墓が出現する墓域と、方形周溝墓のみが出現する墓域があった。これは、従来墓造墓集団と方形周溝墓造墓集団がどのような関係にあるかを示唆していると思われる。つまり両墓制が混在する墓域では、それらに対応する居住域には両集団がいたといえるだろう。居住域は別で墓域を共有していたとも考えうるが、墓の数からみて、墓域を共有していたと考えるには無理がある。

では、方形周溝墓のみからなる墓域に対応する居住域の状況はどうか。表１の集成表をみても、弥生前期の段階で４基以上を擁する墓群が7遺跡あるが、その内６遺跡が方形周溝墓のみからなる墓域であり、従来墓と混在しないものが多いようである。ところで前述の通り、方形周溝墓造墓集団のメンバー全員が方形周溝墓に埋葬されるわけではない。基準は明確でないが、その集団の中の「限られた人」のみが方形周溝墓に埋葬され、他のメンバーは従来墓で埋葬されるわけである。つまり、個々のメンバーとして墓制は異なるが、方形周溝墓造墓集団として同じ居住域に住むと考えられる。

山中遺跡20では溝で境界を設けて墓域と居住域を分け、居住域（竪穴建物）の変遷と造墓活動が対応していることをうかがわせた。上述の議論に立てば、この居住域の住人のうち「限られた人」は方形周溝墓の墓域に埋葬されるが、他の住人は従来墓（別な地域）に埋葬されるということになる。

２）短期的な集落と長期的な集落

墓域の変遷をみていくと、墓域には短期的なもの、長期的なもの、一時途絶えるが再度使用される墓域がみられる。これらの事象は当該の墓域に対応する居住域の盛衰を反映しており、その住人たる集団の動態を示している。短期的な墓域の多くは洪水等の自然環境の変化により廃絶したと考えられ、この時期には人為的理由（戦い）での居住域・墓域の廃絶を証左するものはみあたらない。

ここで、図６の荒尾南遺跡２の墓域を再確認したい。この墓域は長期にわたり継続し、各時期によって墓域の中心が移動しているものの、巨視的には「荒尾南遺跡」という地域におさまっている。Ⅱ期・Ⅲ期と経るにつれて方形周溝墓の規模が大型化し、群構成もより顕在化する。この地域ではそのⅠ期の初現以来、世代の交代がなされても集団の強い紐帯意識をうかがわせる。

３．３　方形周溝墓からみた集団と階層

一般論として墓制から被葬者やその属する階層を引き出すには墓の規模・形態、副葬品の多寡・奢侈がその指標となる。とりわけ、副葬品は有効な資料であるが、弥生前期の方形周溝墓では顕著な出土例がない。供献土器はともかく、そもそも副葬という習俗があったのかも疑問である。

そこで、集団と階層という問題を、従来墓・方形周溝墓の造墓集団、複数埋葬・重複埋葬という埋葬方法、および群構成の視点から考えてみたい。

1）造墓集団からの考察

これまでの検討から、方形周溝墓という新しい墓制は進取気鋭の集団において創出・採用され、その集団の中の「限られた人」のみが埋葬されたと想定される。その造墓にあたっては従来墓よりも労働力を必要とすることから、「限られた人」は集団内の有力者といえるだろう。また、多くの墓域では両墓制が混在しないということから、新たに方形周溝墓用の土地が開拓されたといえるだろう。このように、従来墓造墓集団に比して方形周溝墓造墓集団は、あえてより多くの労働力を必要とする墓制を採用しているのである。

ここで階層という概念を「さまざまな社会的資源とそれを獲得する機会の配分が不平等な社会構造」（田中・佐原2002）と定義すれば、前述の労働力は社会的資源にあたり、またどの集団においても労働力を十分に整えうるというものではない。そこに両造墓集団に階層差をみることもできるが、その労働力を必要とする造墓作業は当該集団が自発的に行うものであり、不平等な社会構造からくるものではない。したがって、造墓に対する労働力の差をもって両造墓集団の間に階層差があるとみることはできないであろう。

2）複数埋葬・重複埋葬事例からの考察

埋葬施設の遺存状況はよくないものの、表1にみるように弥生前期では単数埋葬が多いといえる。その中で、複数埋葬は例外といえるだろう。後から埋葬される人は、「限られた人」と最も近い関係にあるとの想定ができる。人骨の遺存がないので、それらの関係（血縁・非血縁など）は実証できないが、九州北部を中心とした西日本での土器棺墓や支石墓の人骨の分析結果（田中2008）から類推すれば、この時期の複数埋葬はキョウダイ（シマイを含む）のような血縁関係にあり、夫婦の関係ではない。

次に、重複埋葬について検討する。長期にわたる墓域では二つの墓が重複することがよく観察される。時間を経てその痕跡が消滅している場合や狭小の墓域の場合などではありうることであり、普遍的なものといえるだろう。これに対して、造墓の時期が近いにもかかわらず、切り合い関係にある墓がみられる。この切り合い関係には２種類があり、ほぼ完全に重複している事例（東武庫遺跡２の３・４号墓）と、方形周溝墓の方台部の一部が重複する事例

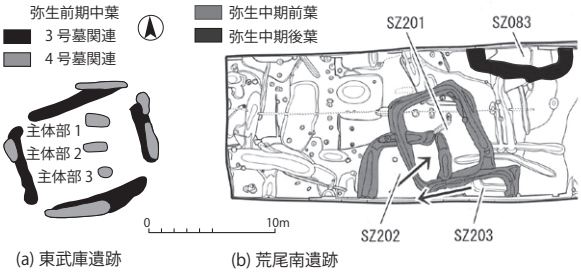


図７　重複埋葬事例

（荒尾南遺跡21のSZ201・202・203）である。これらは造墓の時期が近いことから、先の墓の痕跡がなくなっているわけはない。また、空閑地のある墓域においてもみられるので、単に墓域の広さの問題ではないようである。このような点を考慮すると、この重複は確たる意図をもっていると考えざるを得ない。

図７（a）の東武庫遺跡２は完全な重複の例である。３・４号墓ともに弥生前期中段階古相の所産であり、切り合い状況から造墓順序は３号墓→４号墓である。両者とも規模がほぼ同じで、４号墓の造墓に際して、まるで３号墓を覆うように造られている。また４号墓では複数埋葬（３基の主体部）も検出されている。土器１型式の間のこのような状況から、３・４号墓の被葬者は近い関係にあり、４号墓ではキョウダイ原理での埋葬が行われたとみることができるであろう。図７（b）の荒尾南遺跡21は部分的な重複の例である。ともに弥生中期初頭（報告書ではⅡ期）の所産であり、切り合い関係からSZ203→202→201の造墓順序であることがわかる。ここではSZ203に入れ子状にSZ202を重ね、さらにSZ201を同様に重ねている。短期間に重複して埋葬されているということから、これらの３人の被葬者は同じ集団の構成員であり、やはり近い関係であったと推定ができる。ただし、先述の複数埋葬が重複埋葬よりも、より近い関係であるとみることができるであろう。

3）群構成からの考察

多くの墓からなる墓域では方形周溝墓の長軸の方位や群集状態を基準にグルーピングをおこない、群構成を抽出している（山田1995、藤田2015など）。弥生前期では東武庫遺跡２では５グループ、荒尾南遺跡21では２グループ[4]、山中遺跡20では２グループなどが事例研究でわかった。

ところで、群構成とは「限られた人」を輩出した集団が、その後の埋葬に際して先行の墓を意識した配置をとった結果であるとの想定はできるだろう。したがって、一つの墓域に複数の群構成があるということは、「限られた人」を輩出する集団が複数存在するといえる。上記の事例では、どの群構成も数基の墓からなる群であり、各墓の規模もせいぜい10ｍ以内であることから、複数の集団の間に明確な階層差をみることはできない。

３．４　弥生時代前期の社会像－社会構造

これまでの議論をもとに弥生前期の社会像－社会構造を推定したい。集団・居住域・墓域の関係について、図８にその概念図を示す。ここで、a1・b1などは集団のメンバー、集団ａ・集団ｂなどは各々の共通の祖先・系譜を意識した出自集団（クラン）であり、家族とは限らない[5]。また、ここでは居住域Ⅰと居住域Ⅱの墓域を別にしているが、もちろん共有していてもよい。

居住域Ⅰでは集団ａ・集団ｂが方形周溝墓造墓集団で、集団ｃは従来墓造墓集団である。集団ａではa1、集団ｂではb1・b3が「限られた人」であり方形周溝墓で墓域Ｘに、その他のa2・a3・b2は従来墓で墓域Ｙに埋葬される。また、集団ｃではメンバーの全員が従来墓で墓域Ｙに埋葬される。居住域Ⅱの集団ｄは方形周溝墓造墓集団でありd2が「限られた人」であるが、d1・d3とともに墓域Ｚに埋葬されることを示した。

事例研究でみた複数埋葬・重複埋葬はb1とb3、さらに群構成は集団ｂ内での紐帯を顕示しているとみられる。しかし、これまで検討してきたように、集団内で方形周溝墓を採用する「限られた人」と従来墓の人の間に階層差はみとめられない。また同様に、方形周溝墓造墓集団と、従来墓造墓集団の間にも階層差がみられない。

以上から、弥生前期にはすでに稲作農耕が定着している時期ではあるが、墓制からみるかぎり、均質な社会であったといえるだろう。

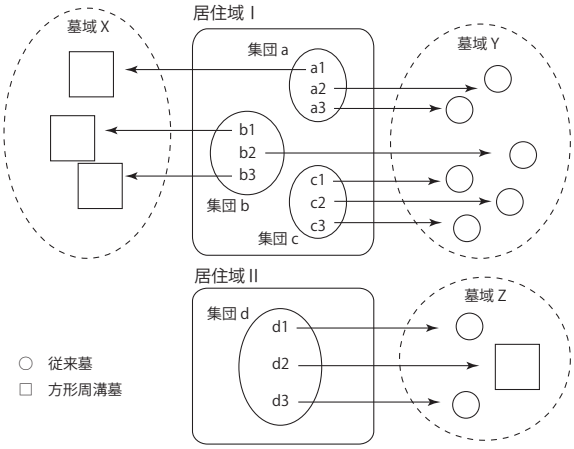


図８　弥生時代前期の集団・居住域・墓域の概念図

おわりに

近畿・東海地域の弥生時代前期の方形周溝墓の検討を通して、当該期の社会像を提示した。すなわち、土壙墓・土器棺墓・木棺墓・方形周溝墓など墓制はちがうが、それらは集団が自ら選択しうる墓制であり、社会的資源の不平等からうまれたものではない。よって、階層差が発生していない社会構造にあったと考える。ただ、集団内では、そのメンバーの「限られた人」のみが方形周溝墓に埋葬されるというルールがある。この人物の性格づけは弥生前期だけの事例研究では明らかにできない。

弥生中期には近畿地域での墓制は方形周溝墓が席巻するが、それを、方形周溝墓という墓制からみると、やはり「階層差」が見えてこない（浅井2015）。弥生前期の従来墓集団が、弥生中期にはどのように方形周溝墓造墓集団に変貌するかを検討することにより、おのずと「限られた人」の性格も明らかになると考えている。

【註】

(1)これまでの研究の集大成としては、『墓制から弥生社会を考える』（六一書房、2007年）がある。また、『考古学ジャーナル』No.674（ニュー・サイエンス社、2015年）では「方形周溝墓　発見と研究50周年」と題して特集を組み、これまでの研究の歩みと課題を載せている。

(2)東武庫遺跡の最古の方形周溝墓の時期判定については当該報告書では近畿第一様式古段階（弥生前期前葉）とされるが、判定の資料が十分ではないとして、近畿第一様式中段階（弥生前期中葉）であるとの考えもある（中村弘1998）。

(3)中村大介（同2015）によれば、近年の韓半島での調査では、紀元前９世紀に遡る周溝墓が検出され

ているとのこと（春川泉田里遺跡）。支石墓や方形周溝墓という墓制の成立への影響などの議論が深まると思われる。

⑷報告書ではグルーピングに触れていない。分布状況から、SZ137・138・145・153・154、およびSZ170・192・193・221の２グループがあると筆者が判断した。

⑸弥生時代前期から中期前半には稲作農耕が定着し人口が爆発的に増加する。これにともない人口密度が大きく拡大した集落からの分村が活発化する。この分村化は無秩序ではなく、その実態はクランの分節化とみられている（禰宜田2011）。

【参考文献】

浅井良英2015「弥生時代中期社会の一様相」『淡海文化財論叢』第７輯　淡海文化財論叢刊行会

角南聡一郎1999「初期区画墓と土器棺墓」『古川遺跡』門真市埋蔵文化財発掘調査報告書第6集　同教育委員会

田中良之2008『骨が語る古代の家族　親族と社会』吉川弘文館

田中琢・佐原真2002『日本考古学事典』三省堂

中村大介2004「方形周溝墓の成立と東アジアの墓制」『朝鮮古代研究』第5号　朝鮮古代研究会

中村大介2015「朝鮮半島における周溝墓の展開」『考古学ジャーナル』No.674　ニュー・サイエンス社

中村　弘1998「近畿地方における方形周溝墓の出現」『考古学論集』上巻 網干善教先生古希記念会

禰宜田佳男2011「墓地の構造と階層社会の成立」『講座日本の考古学6 弥生時代（下）』青木書店

端野晋平2014「渡来文化の形成とその背景」『列島初期稲作の担い手はだれか』すいれん舎

藤田英博2015「方形周溝墓の様相」『荒尾南遺跡Ｂ地区　第8分冊』岐阜県文化財保護センター調査報告書第131集　同センター

本間元樹1997「弥生時代前期の区画墓」『田井中遺跡（1～3次）・志紀遺跡（防1次）　陸上自衛隊八尾駐屯地内施設建設事業に伴う発掘調査報告書』大阪府文化財調査研究センター調査報告書23集　同センター

山岸良二2015「新たな方形周溝墓研究へ「５つの提言」」『考古学ジャーナル』No.674 ニュー・サイエンス社

山田清朝1995「周溝墓」『東武庫遺跡』兵庫県文化財調査報告第150冊　同教育委員会

渡辺昌宏1999「方形周溝墓の源流」『渡来人登場』大阪府立弥生文化博物館図録18　同博物館

【発掘調査報告書】

事例研究でとりあげた遺跡の報告書は下記の通りである。図３～図７は当該報告書の図を引用・トレース・改変した。紙幅の都合上、他の遺跡の報告書は割愛する。

東武庫遺跡02（兵庫県尼崎市）；　兵庫県教育委員会1995『東武庫遺跡』兵庫県文化財調査報告第150冊

北仰西海道遺跡11（滋賀県高島市）；　今津町教育委員会1987『今津町文化財調査報告書第7集』

山中遺跡20（愛知県一宮市）；　愛知県埋蔵文化財センター 1992『山中遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第40集

荒尾南遺跡21（岐阜県大垣市）；　岐阜県文化財保護センター 2015『荒尾南遺跡Ｂ地区』岐阜県文化財保護センター調査報告書第131集ほか